

居場所が

たくさんある社会に



子育てエッセイも8年半連載

編集部 シードレさんには、コムコム

誌上で2001年4月から8年半に渡り、「子育てエッセイ」を連載していただきました。シングルマザーのシードレさんが発達障害のある娘さんの子育てに奮闘する様子に、読者から大きな反響がありました。連載をふり返ってお話をうかがえますか。

シードレ 当時は、思うようにならない自分の子育てとにかくモヤモヤ悶々とした思いを抱いていました。

その体験をコムコムの連載で書かせていただくことで自分なりに整理できましたし、誰かに悩みを聞いてもらえる、という安心感に救われました。読者の方からいただく励ましも、本当にうれしかったですね。

子育てエッセイがスタートしたのは、現在16歳になる娘が保育園に通いはじめた頃。私が一番気になったのは、娘があいさつできないことでした。日常の会話は普通にできるのですが、朝起きた時の「おはよう」、何か悪いことをした時に「ごめんささい」をいうなど、あいさつがどうしてもできなかつたのです。初対面の人

なら、緊張してできないのもわかります。でも、保育園の先生や友達とか、よく知っている親しい人でもできない。例えば、お菓子をいただいたら、「こういう時はどういうの？」と促すのですが、娘は「ありがとう」と口にできないのです。気になりながらも、ふだん生活していく分には問題はなく、言葉や運動の発達も年齢水準かそれ以上だったので、まあ、これも個性かなと思っていました。

編集部 それが徐々に心配になっていった。不安に思うようになったのは、何かできごとがあったのですか？

フリーライター・翻訳家

シードレ・ヒロ

1960年、福岡県生まれ。立命館大学経済学部卒業。英国エッセクス大学社会学部修士課程修了。外国公館に非常勤勤務しつつ、ライター、翻訳家として活躍。「医療生協の情報誌 comcom」に、自らの体験を織りまぜた子育てエッセイを2001年4月号から09年9月号まで執筆。著書に「見えなかった発達障害 ちょっとずつ前に進んだハハとコの記」（新日本出版社）、「ドメスティック・バイオレンス 女性150人の証言」（明石書店／共著）。

シードレ あいさつは、小学校に入ってからやはりできませんでした。1年生の運動会でのこと。保育園ではリレーの選手に選ばれるほど足が速かった娘が、どうも萎縮して

全力で走っていないように感じました。保育園時代も、集団で何かをやる動きが止まって立ちつくすことがしばしばありました。「自分はみんなとちがう」ことを本人も自覚してき

たように見受けられました。そこで、スクールカウンセラーに相談しました。その方は、発達障害について詳しい方で、検査をしてもらってはどうかとアドバイスしてくれました。

編集部 発達障害は症状がわかりにくく、診断にも時間がかかります。そのため悩みを深める親御さんも多いですね。

シードレ そうですね。知的障害があるかないかによっても違いますし、多動な子もいれば、あまり動かないおとなしい子もいます。おしゃべりな子や、娘のように黙ってしまう子もいます。発達障害は、捉えにくく、見えにくいものです。でも、検査を受ける

ことで、これからの方向性について手がかりを得ることができます。検査は、決して負のレッテルを貼るためのものではありません。

編集部 この子にはこういう特性があるのだとわかれば、それに沿った援助もできる。それで検査を受けることになったわけですね。

シードレ 医師の所見によれば、知的な遅れはないが、自閉症児の特徴が少し見られ、何らかの発達障害の可能性がある。ただ、治療が必要な状態とまではいえないので、日常生活の中でしばらく様子を見ることになりました。

ところが、今度は不登校になったのです。学校に行きたくないと言いついたのが、小学校2年生の頃。3年生の1年間は、1度も学校に行きませんでした。学校側としては、学校に来てもらわないと対応ができないという立場で、私は何とかこの状況を変えるきっかけはないかと考えていました。

編集部 その学校が娘さんを受け入れてくれないのなら、受け入れてく

れる学校を探すしかない。

シードレ そうです。通常学級で難しいのであれば、心障学級(心身障害児学級、現在は特別支援学級)へ移ることも考えてみてはどうかという話になり、4年生に上がる時に心障学級がある他の小学校に転校しました。

交流の場として「まちの保健室」も

シードレ 当時の私は、子どもの不登校で困っているお母さんたちのネットワークがあればいいなと思っていました。

編集部 同じ悩みを持つ人たちが交流できる場を探されていた。そこで悩みを共有し、「私はこんなふうをやったのよ」と経験を話し合えればいいですね。

シードレ 悩みを持つみなさんは、孤立無縁な状態だと思っていますから、「悩んでいたのは、わが家だけじゃなかった」というのは救いになります。

例えば、小学校区くらいの単位で、



ちよっと困ったことがあれば気軽に立ち寄れて、話ができるような場があればいいなと思うんです。小学校の養護教諭(保健室の先生)が、そんな「まちの保健室」があるといいね、とおっしゃっていたのが印象に残っています。

編集部 「まちの保健室」、それはいいですね。健康なまちづくりの一環として、子育てで悩まれている親御さんを、まちぐるみで支援できるような活動ができればいいなと思います。

シードレ まさに地域が疑似大家族になるイメージですね。子育てだけでなく、日々の介護などで困っていても外に助けを求められないケースもあります。そういう人たちが深刻な事態になる前に、気軽に相談できる場が地域に欲しいですね。

編集部 地域ぐるみで子育てをする、高齢者を見守る、生活に困窮している人の手助けをする。昔は自然に行われていたのですが、今の時代は、それが切実に求められている気がします。

「チームK」を発見！

編集部 発達障害の子どもを支える人や施設の横のつながりを大事にしたい。そんな想いからシードレさんがつくられた「チームK(Kは娘さんの頭文字)」について、お話しさせていただきますか。

シードレ 娘は、特別支援学級のある小学校に転入してからも、学校に行けるようになったり、行けなくなったりと一進一退の状態でした。学校に行けない日が続くと、「様子はどうですか」と学校から電話がかかってきます。そこで、娘の近況をお知らせするために「最近はどうです」と様子をレポートにまとめて定期的にファックスで送っていました。ある時、これを学校だけでなく、相談をしていた教育センターや病院などの関係機関にも送って読んでもらおうと思いついたのです。

編集部 なるほど、このレポートで情報を共有しようと考えられた。支援してくれるみなさんの認識を共通にして、より適切な援助に結びつけることができますね。

シードレ 「チームK連絡帳」と名付けたレポートは、156回続きました。

また、病院の医師や療育担当の保育士、小学校の先生、子ども家庭支援センターや教育センターの担当者など、支えてくださる方々に実際に集まっていただき、娘の現状と課題をみんなで共有して、これからのとりくみを話し合う会議も定期的に行っていたできました。

いろんな立場の支援者や機関が、ひとつのチームとして連携をとりながら複合的に支援していく。そんな「チームK」の発足で、私は孤立感がずいぶん軽減されました。私と同じように発達障害や不登校といった悩みを抱える親御さんがいらっしゃれば、こんなやり方もあるのだと、「チームK」をモデルケースとして参考にしてもらえればうれしいですね。

中学時代は

無遅刻・無欠席

編集部 「子育てエッセイ」の連載は、娘さんが中学校の通常学級に進学するところで終了しました。その後、中学生以降の生活はどうでしたか？



156回続いた「チームK連絡帳」

シードレ 中学校では小学生の頃と様子が変わって、自分で学校に行けるようになりました。それにまだまだ不十分なながらも、自分で考えて行動できるようになりました。高校生になった今では、ごく普通の思春期の女の子です。現在では、娘のエピソードをネタに文章は書けなくなっています(笑)。ちまちまとブログに書くのがやっとです。

編集部 それだけお母さんの手がかからなくなってきたわけですね。何かきっかけがあったのですか？

シードレ 中学生になってがんばろう、という決意が娘にもあったと思います。だけど、それ以上に入った中学校の環境が娘に合っていたのです。1学年がわずか9人という生徒数が少ない学校で、担任と2人の副担任、計3人の先生で受け持つ手厚さでした。娘は集団が苦手ですので、生徒数の少ない学校を選んだことが大正解だったわけです。人数が少ないから、必然的に娘もいろんな係を担当し、生徒会もやりました。本人は結構楽しそうでした。そのためか、中学から高2の現在に至る

まで無遅刻・無欠席です。環境がいかに大事かということですね。

編集部 いや、それは素晴らしい。

居場所の選択肢は たくさんあった方がいい

編集部 シードレさんは今、自閉症やアスペルガー症候群などの人たちに支援する「自閉症スペクトラム支援士」の資格を取るために勉強されていますね。この資格を取ろうと思われたきっかけは何ですか？

シードレ 発達障害を抱えた不登校の娘に、私は適切な対応ができたのだろうかという疑問と後悔から、もっと勉強しようと思いました。これまでの子育ての経験を活かしながら、新たに学んだことを、どこかで役立てることができたらいいなと思っています。

編集部 「どこかで」というのは、具体的にイメージしていますか？

シードレ 例えば不登校の問題でいうと、学校以外に居場所がないので、

学校に行くしかないという発想です。親としては子どもが学校に行かないと、将来を不安に思い、「なぜ、学校に行かないの!」と怒ることになります。私がまさにそうでした。

学校に行きたくなければ行かなくてもいい。学校に行かなくても、勉強を教えてくれる人がいたり、いっしょに遊んでくれる人がいればいい。そんな学校以外の選択肢があれば、当事者はとても救われます。ただ、こうした居場所は1か所だけでなく、いっぱい作ることが必要です。居場所の選択肢をいろいろ作ってあげる。一度つまづいた子でも、やり直せる。こちらが合わなければ、あちらといえるように選択できることが大切です。

編集部 地域住民や生協の力を活かし、居場所づくりにとりくむことができます。行政には、その活動の支援をしましょう。とにかく、いろんな団体と連携しながらとりくむことが大切なのかもしれません。子どもだけでなく、高齢者やひきこもりの方など、いろんな人たちの居場所がたくさんできるといいですね。今日はありがとうございました。

シードレ・ヒロさんの サイン入り著書をプレゼント!

『見えなかった発達障害
ちょっとずつ前に進んだ
ハハとコの記』
新日本出版社
志井戸 礼 著

3名様

本誌綴じ込みハガキにて
ご応募ください。

